

技芸の風「つみ木で山に動力を」

積み木で山に動力を

荻野雅之さん 山梨県田富町

■積み木が子どもたちの心を豊かにする

辺り一面、積み木に囲まれて、子どもたちが目を輝かせて、黙々と手を動かしている。椅子に乗って自分の背丈よりも高く積む子、崩れた積み木にがっかりする子、小さい子が積んでいるものが崩れないように横を補強している子、隣と組み合わせて建造物を造る子。ピラミッド、城、門、橋、山…、ヒノキの香りが漂う中に“積み木の王国”が広がる。

「2万個の積み木で、こんな感じで遊ぶとは思いませんでした。どれもかれものが芸術。子どもたちの積み木への関心は衰えません。思っていた形どおりにならない時、新しい工夫をします。積み上げて完成した時の喜びや、せっかく積み上げたのにアツという間に崩れてしまう時の妙な興奮、途中で積み木が成長しないことへの気づき、空間を分け合う心、連帯感、安らぎ、自信…。積み木を通して、子どもたちは新しい自分を発見するんです。そういうところが魅力なんだと思います」

ゆっくりした時間の中で、確実に子どもたちが変化していく。創造性を育むだけでなく、積み木が子どもの心を豊かにする。これを「積み木1つからはじまる子どもの心の環境整備」と荻野雅之さんはいう。

荻野さんがつくる「楽つみ木」は、3cmの立方体、底辺3cmの台形、長さ12cmの板の3種類。「たかが積み木」ではない。3種類の小さな積み木が子どもたちの創造と想像の潜在能力を引き出し、限りなく多様な夢を育てる。

■積み木は山に関心を寄せてもらう変化球

荻野さんの「楽つみ木」の材料は、地場産のヒノキ間伐材。

家具作家の荻野さんが積み木を作り始めたのは、長男の「家具だけじゃなく、子どもが遊べるものを作って」という一言から。積み木を作り始めた当初は、家具材料である北海道産のナラなど広葉樹で作っていた。それがヒノキに替わったのは、「山から木が降りてこなくて、製材所が危ない」という報道番組を見た時から。「『山から木が降りてこない』というのは、ショックでした」。多くの人工林が、手入れの行き届いていない有機的な関係が崩れている森林だということを知った。口先だけで「林業が厳しい」「山は危機だ」といっても、世間は振り向かない。「相手を納得させるためには、変化球を投げたり、違う方向からも投げないと。広葉樹だけが家具の材料じゃない。我々、木を活かす者たちが、地域の山に目を向け、そこから出る木を活かさねば」。

ヒノキの積み木は、「山に関心を寄せてもらう1つの小さなきっかけになれば」という思いから誕生した。

以来、ヒノキの積み木を作り続け、全国の幼稚園や小学校で荻野さんの積み木が購入されている。また、小学校や図書館などに貸出し、そこへ絹代夫人と赴いて、積み木が生まれる山の話もしている。「積み木で思いっきり遊んだ後に、この積み木が生まれる山の話や、これは森林を大切にするための積み木なんだという話をすると、子どもたちにすごく伝わるんですよ」。荻野さん夫妻は、万単位の「楽つみ木」を貸し出す“積み木図書館”を作りたいと張り切る。

これからの主人公である子どもたちに、木に触れながら、手触りや香り、木の良さを、心を育てる右脳で知ってもらいたい。そして、積み木を通して、森林を大切にできる心が育ってくれたらと願う。

■有機的なつながりを伝える

荻野さんは、山梨県庁舎の来庁者受付カウンター製作時に知り合った、甲斐東部製材協同組合からヒノキを調達している。

昨夏、荻野さん夫妻は、この地域の人工林に入り、伐採から製材までの過程を追った。「今まで山を1つの緑の塊でしかみていなかったから、緑豊かだと思っていたけど、実際、中へ入ってみると、放置された山と間伐された山が一目瞭然。遠くからみているだけでは、山の現状はわかりませんね」と絹代夫人。

「林業は私たちの生活に直接関わっている最先端の産業であり、森林の仕事は社会貢献です。森林がどれだけ大切なのかは、世間一般では危機感としてある。山の現状を林業関係者が話すよりも、一般の人が実際に現場へ入って見て感じて体験する方が、山への認識をリアルに感じます。でも、それを筋道を立てて伝える人がいないんです」。荻野さんは、「環境」という大きな枠ではなく、人工林の役割や山から最終消費者までのつながりを分かりやすく、体系的に伝えるプロが必要だという。

山に入っている山仕事のプロが高齢化している現状で、10年後20年後に『森林は大切です』といたくても、伝える人がいない。もう残したいものを残せるか否かのタイムリミット。だから今、自分ができる形で、あるべき姿をみえない人たちに現したい。積み木をきっかけに、多くの人に、植林された森林があって、伐採されて、製材所に行って、木が自分たちのところへ降りてくるまでの道筋、有機的なつながりをみてほしいという。

■まず職人が国産材を再認識すること

家具づくりは、使うオーナーがどういう好みなのかというデザインから始まる。需要を喚起するためには、家具も山も、作り手が自分のデザインをしっかりとつことが大切。山側は欠点のない優良材の生産を目標に木を育ててきた。そして木を活用する側も、曲がりや腐れ、節という欠点を活かして消費者にPRする努力をしてこなかった。自然界には様々なものがあって当然なのだから、常に『この材料ならこう活かせる』と考えながらモノづくりをしたいし、提案していく、そういう技能をもった仲間を増やしたい。

「エンドユーザーに一番近い、デザイン（哲学）をもって形にあらわす仕事をしている私たち木工家（職人）たちが、国産材を再認識して、付加価値をつけて率先して木を使う運動をおこしていかなければいけない」

■積み木は森林再生への出発点

荻野さんの積み木は、200個で1万1000円。1つずつ面取りをし、どんな小さな傷があってもはねるといふ丁寧な作業を経てできる積み木だが、単価を上げないために夫妻だけで作り、顧客に直接販売する。「『まけてくれ』という方もいらっしゃいます。でも、健全な山をつくるために、何年何十年手をかけて育ててきた山から出してきた材を使っていることを考えたら、これは相応の価格。お客さんが積み木を買うことで、また次の山の手入れをするために、そのお金が山へ還るんです。だから『正当な価格で買って下さい』とお話するんです」（絹代夫人）。

「私たちは、“積み木で森林を大切にすることができる”という積み木のもつデザイン（哲学）を理解して下さるお客さんだけに売る。だから、第三者を通してはダメなんです。時間はかかるけれども、確実にわたったところで動き始める。それが私たちのめざす積み木です」。子どものためだけの積み木ではない。積み木を通して、山へ人々の目を向けていく。「積み木は森林再生への出発点なんです」。



荻野さんの手によって新しい命が吹き込まれ生まれ変わったヒノキの積み木。積み木で森林に動力を与えたい。荻野さんの思いから生まれた、小さな積み木は少しずつ広がり、森林再生に向け、有機的な関係をつくる大きな力になりつつある。

（「林業新知識」誌 2003年1月号掲載、社団法人全国林業改良普及協会）

※この「林業新知識」記事に掲載されている楽つみ木の価格は、2003年当時の旧価格です。その後価格改定させていただきますので、「購入の方法」の欄でご確認くださいませよう、よろしくお願いいたします。